

TOPICS

香川大学創立70周年記念イベント事業 瀬戸内国際芸術祭2019 香川大学参加記念シンポジウム 2月16日

香川大学は、今年、創立70周年を迎えます。創立70周年記念事業の企画第一弾として「瀬戸内国際芸術祭2019 香川大学参加記念シンポジウム<これからの瀬戸内とアート>」を、サンポート高松かがり国際会議場で開催しました。瀬戸内国際芸術祭総合ディレクターの北川フラム氏を招いて、「瀬戸内国際芸術祭と世界の動き」と題して行った基調講演では、今回で4回目の開催を迎え、今や世界中から注目されるようになった瀬戸内国際芸術祭のこれまでの歩みなどが紹介されました。今回初めて、作品出展で参加する香川大学が、こ

れからの瀬戸内国際芸術祭の拠点となり、プラットフォームとなるよう激励もありました。また、香川大学寛善行学長が進行役となり「これからの瀬戸内とアート」をテーマに、北川フラム氏と東京藝術大学美術学部長の日比野克彦氏が対談。「アートのもつ役割がますます大きくなっており、地域が元気になるきっかけになっている」「アートと人との繋がりについて、医療も福祉も近いものがある。アートは社会を救う糸口になるのでは」とこれからの瀬戸内の未来の可能性を示唆されました。



特別対談

第12回わくわくコンサート「海をわたる芸術家たち - テーマ国・アメリカ -」 2月10日

今回は実行委員長として学生やアドバイザーの先生をはじめ、たくさんの方と関わることができました。その中でも特に事前準備の大切さを学びました。当日はお客様の笑顔や励ましの言葉をたくさんいただき、このコンサートの意義を改めて実感しました。3年間携わってきて、今回が私を一番成長させてくれました。この経験をこれから何かの形で生かしていきたいです。(実行委員長 原田双葉)

私は主に楽器体験と楽曲紹介の実演を担当しました。楽器体験ではヴァイオリンを子どもに指導しましたが、事前に思っていた以上に子どもが真剣で楽しそうな顔をしていたのが印象的でした。楽曲紹介では曲目紹介をする先輩と共に協奏曲の構造を紹介しました。ソリストの古海行子さんをはじめ、出演者、お客様からの熱気を身近に感じることができました。(コンシェルジュ 秦直樹)

3回目で初めて出演者としても参加し、ダンスの際には多くのお客様に盛大な拍手をいただきました。ロビーではイベントの運営、舞台では出演者としてステージに立ち、このコンサートは、出演して下さる方々はもちろん、ボランティア学生や実行委員など様々な方々の力で成り立っていると改めて感じることができました。来年もコンサートの運営に貢献できるよう頑張ります。(実行委員 原百合子)



会場：サンポートホール高松 大ホール



ロビーでの楽器体験：アルトリコーダー



跳躍：ウェストサイド物語より



チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 (全楽章)



ロビーでの楽器体験：ビオラ (Alto)



ダンス

香川大学では今後、全学でデザイン思考教育を取り入れていきます。ところで「デザイン」とは何でしょう？ そんな疑問に、創造工学部 創造工学科造形・メディアデザインコース10人の先生方に、「デザイン」と「お一人ずつ決められたテーマ」をかけて、語っていただきました。(5回目/10シリーズ)

DESIGN×ANALOGY

創造工学部 創造工学科造形・メディアデザインコース 教授

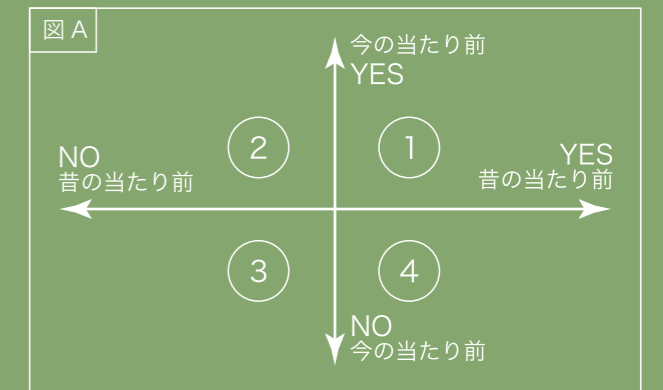
佛圓哲朗

DESIGN×OOOOOという題でOの部分の何にするか、かなり悩みました。私の専門である「SYSTEM」や「AUTOMOBILE」が良いのか、あるいは「SCIENCE」でも面白いのか、と考えました。そして、結論は、私の座右の銘でもある「温故知新」とも相性の良い「ANALOGY」をとりあげ、DESIGN×ANALOGYとして、考え方の架け橋や発想を拡大するイネーブラーの役割について私の経験を用いて考えてみたいと思います。

まず私の座右の銘である「温故知新」についてですが、今あるイノベーションの産物と言われているものは、まったく今まで考えていなかったものから生まれてくるものは少なく、昔あったアイデアや理論が基になり、イノベーションが生まれてくることが多いのです。例えば、アナログのレコードからデジタルのCDに変わったことは、普通に考えれば非連続な技術革新に見えますが、実際にはコンピュータに真空管を使っていた時代(1940年代から1950年代前半)と同じ時期に、デジタルCDの理論的背景となるサンプリング定理が確立され、その理論的な原型を見ることができました。(サンプリング定理の基になる数学は古くはニュートン、フーリエやガウスにまで遡ることができます) この原型が、コンピュータストレージ技術の進展とともに花開き、CDとなったのです。まさに、古きを温めて新しきを知る、つまり「温故知新」の実例だと思います。

イノベーションは、i-schoolの堀井先生の定義では「未来の当たり前」と言われています。堀井先生のワークショップの中で、「未来の当たり前=イノベーション」を探るツールとして、図Aのような2軸のマップを提案されており、アナロジーを考えるうえで有効なイネーブラーです。普通、「将来の当たり前」を考えると「昔も今もあたりまえでない領域」(図Aの③の領域)でアイデアを考えがちですが、ここで重

要なのは、①の「今も昔も当たり前前の領域」で項目を列挙し、その将来像を異なる領域のアナロジーを用いて視点を変え、アイデアを考えることです。



私自身が経験した予防安全技術(ぶつからないクルマ)の研究事例(1991年にスタート)が、当時は意識していませんでしたが、上記のイネーブラーに該当するので紹介しましょう。その当時の自動車死亡事故は年間1万人を超えており、死亡事故を減少させるエネルギー吸収車両構造やエアバッグなどのパッシブセーフティの研究開発は、1990年当時(その当時の今)もその昔もあたり前でした。(図Aの①) その将来像をアナロジーを用いた視点で変革するため、実際に用いたのが、1990年頃ブームを迎えつつあったデジタルCDの事例(前章参照)でした。このアナロジーからパッシブセーフティ(被害を軽減する技術)からアクティブセーフティ(事故そのものをなくす技術)に変換すべきという基本構想が生まれ、研究に着手しました。もちろん、すぐに商品化できたわけではありませんが、その当時の技術の原型(プロトタイプ)や思想が基になり、コンピュータ技術の向上とともにシステムの信頼性が向上し、センサーやコントローラ類のコスト低減を生み、現在ではクルマのキーテクノロジーとなっています。これは、DESIGN×ANALOGYの実例であり、温故知新の成果であるとも言えると思っています。